

# 「核廃絶へ行動したい」

原爆ドームなどを見て回る関西学院大と広島女学院大の学生ら＝5日午後、広島市中区



関学大講座の参加学生

## 被爆地巡り平和考え

### きょう原爆の日

関西学院大（西宮市）は毎夏、学生らが広島市を訪問し、被爆した建物などを巡る平和学特別講座「ヒロシマ」を続けている。同大の学生が平和記念公園の折り鶴に放火した事件を契機に、12年前から開始。これまでに約240人が参加した。今年は18人が原爆の日（6日）を前に、広島の子供と一緒に被爆地を歩き、平和への思いを強くしている。

同大は、宣教師で初代院長のW・R・ランバートが広島女学院大設立後の運営を支援している。2003年、公益

（1面参照）

財団法人「広島平和文化センター」（広島市）と相談し、平和学習の機会を設ける検討を始めた。

その直後の同年8月、関学大生が折り鶴に放火する事件が起きた。「今だからヒロシマを学ばなければ」と計画を進め、04年から開講する。

今年19年を除き毎年、原爆の日の前後に数日間実施。被爆者の話を聞き、原爆ドームなどを巡っている。

関学大1年の津留裕香さん（18）は「原爆の衝撃で崩れ落ちたがれきに、被害の大きさを実感した。恐ろしい核兵器を廃絶するため、自分たちも何ができるかを話し合いたい」と感想を語った。18人は6日、学生ら約350人の犠牲者が出た同女学院の追悼式典に出席する。

（杉山雅崇）